



ミンガラバー

認定 NPO法人
日本・ミャンマー
医療人育成支援協会
〒700-0815
岡山市北区野田屋町2-4-18
TEL: 086-224-0102
FAX: 086-221-2554
URL: http://www.mjcp.or.jp

ミャンマー東南部のダウエーの病院と診療所に、岡山協立病院の豊田博医師が車いす35台を贈った。昨年11月、ヤンゴンで妻の皓子さんと岡田茂・協会理事長も同席しての贈呈式があり、タンセイン国民健康財団理事長に購入費を手渡した。豊田さんはミャンマーには何度も出かけており、これは今回の訪問記です。



車いす購入費を贈呈の後、タンセイン国民健康財団理事長(右)から感謝状を贈られる豊田夫妻=ヤンゴンの財団事務所

車いす贈呈の旅 そのお世話に

ミャンマー訪問記

豊田 博医師

今回の目的の一つはダウエーでの車いす贈呈式にあった。ダウエーから更に南の港町ベイは高級食材の海ツバメの菓の産地。野生の海ツバメを

小屋に誘導し、菓をつくらせ、子ツバメが巣立った後の菓を採取するという、実に安全かつ巧妙、狡猾なやり方をすると。海ツバメの菓の料理

夢破れても、されどミャンマーには山河あり、アルコール飲料もあり。10月30日岡山空港19時50分発ー31日羽田0時20分発ーバンコク空港9時55分発ーヤンゴン空港10時30分到着。途中、バンコク空港の乗り継ぎ距離は長く、2キロほど歩かねばならないが、1キロほど過ぎたところで、坐

骨神経痛により歩行困難に。急遽、空港の車いすの助けを借り、搭乗口にやっとたどりついた。車いす贈呈の旅がいきなり、そのお世話になるとは。車いすのありがたさを身をもって感じた。ヤンゴン空港では、数人の若い国軍兵が自動小銃を抱えて巡回していた。その後、市内でも見かけたが、緊張感はなかった。

到着した夜は丸山市郎・駐ミャンマー日本大使に中華料理をご馳走になる。当方も岡山産の日本酒2本を進呈し、一緒に飲む。翌日から行事をこなす、岡山で研修した医師たちとも会合。4日には国民健康財団の事務所へ、無事、車いすの贈呈式を終えた。車いすは発送済みだったので、各施設には行き渡っていると思う。岡山県の故三木行治元知事が奉納した仏像が安置されている洞窟を初めて訪れたが、あいにく閉鎖中。これもまた初めてだが、英国の元ビルマ植民地統治政府の遺構には入れた。赤煉瓦の建物で取り囲まれた庭園風の広大な中庭がよく整備されていた。この建物の一角で、アウンサンスーチーさんの父アウンサン将軍がビルマ独立についての会議中に暗殺された曰く付きの場所である。

ヤンゴンの街をかなりじっくりと見学できた1週間だった。市内は以前のような雑踏と喧騒が、気のせいかな薄れた感じがした。

田中奨学金 新たに5人

ミャンマーからの医療系留学生を対象にした協会の「田中奨学金」の新たな受給生に、5人が決まった。新潟大学大学院の2人、筑波大学の1人、和歌山社会福祉専門学校校の2人。

田中奨学金は、協会理事だった故田中茂人さん(元岡山市医師会長)からの寄付をもとに創設した。ミャンマーの政情混乱などによって日本での生活が厳しい留学生に、困窮度やアルバイト収入などを検討のうえ、月額4万円〜8万5千円を年次ごとに再審査をして、卒業まで支給する。

受給生計9人に

受給生は今回5人が加わって計9人。これまでの4人は全員、岡山大学の学生や研究員だったが、他の大

学などにも広がった。新しい受給生は次のみなさん。



新潟大学博士課程2年
エイミヤミヤカインさん(27) 写真上
ミヨーマウンマウンさん(26) 写真下

歯科医療の将来担う



筑波大学3年
ワイピョーツさん(32)

医療政策に関心持つ

ヤンゴン経済大学卒。ヤンゴン医療技術大学で学んだ医療検査技師でもある。

この知識を生かし、筑波大医学群医療科学類では「医療サービスと費用」について勉強中。医療政策に関心を持ち、いずれは日本と



和歌山社会福祉専門学校1年
チヨースさん(30) 写真上
トゥンサンダーさん(28) 写真下

2つの目標めざして

2人には2つの目標がある。日本の介護福祉の資格を取ること。そして日本の介護制度や知識を母国に広げることだ。

トゥンサンダーさんはミャンマーで介護の仕事をしてきた経験があり、夜は高齢者施設でアルバイト。「体力は大変。でも勉強と両立するよう頑張っています」

岡山県議会で講演

岡田茂協会理事長は昨年11月30日、岡山県議会の地域公共政策セミナーで「ミャンマーの人たちに機会と希望を」というテーマで講演した。

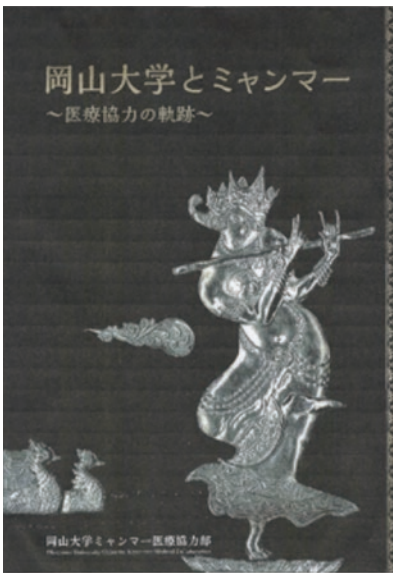
参加した議員約30人を中心に、人材育成の重要性を強調。議員側からはミャンマーの治安状況や政情混乱の収束の見通しなどについての質問が出た。

AED4台を届ける

協会は岡山大学病院から寄贈されたAED(自動体外式除細動器)4台を昨年11月、ミャンマー国民健康財団に届けた。

医療協力の記録集

岡山大学と ミャンマー



表紙の写真はミャンマーの美術工芸品

活動30年たどる

岡山大学とミャンマーの間で進められてきた医療協力の歩みが本になった。協会にとっても活動の多くが岡山大と重なっており、貴重な記録集だ。

「岡山大学とミャンマー 医療協力の軌跡」と題し、同大ミャンマー医療協力部(部長 木股敬裕教授)がつくった。A4判、133ページ。活動に関わってきた医療関係者や団体に配布した。

医療協力は1990年代、当時の岡田茂教授(現在、協会理事長)を中心にして肝臓がんなどの共同研究を行ったのが始まり。その後30年にわたって繰り返し広げられた多彩な活動を研究者交流、学生交流、医療人材育成、医療支援プロジェクトなどに分けて、くわしく紹介。写真も多数掲載している。

交流再開を願う

活動関係者のうち、約30人が思い出を寄稿。ミャンマーは今も混乱収束の見通しが立たず、医療協力は滞り、中断、中止になった事業も多い。寄稿文の多くがこのことにふれ、例えばこのように結んでいる。

「希望にあふれた医学生を受け入れる日がくることを」
「いつの日かあの国のオペ室で一緒に手術を行うときを望んでやまない」

今の医療現場では欠かせない医療機器管理人材(メディカルエンジニアME)をミャンマーで初めて育成してきたプロジェクトは、政情混乱などもあって昨年10月、終了が決まった。JICA(国際協力機構)が事業費5億5千万円を負担、日本臨床工科学士会などが支援。連携役を担った岡山大学の木股敬裕教授(形成外科)に、その経緯と活動の実績を報告してもらった。

困難な状況下、終了

仕事の重要性 認知される

岡山大学 木股 敬裕教授

医療機器管理
人材育成
プロジェクト

メディカルエンジニア(ME)の育成プロジェクトは2018年にスタートした。5年間にヤンゴン医療技術大学(UMTY)育成1年コースで約100名を育て200床以上の病院の70%にMEを配置し、23年末には医療工学士取得の4年制学部を同大内に創設すること。日本では山口県下関市の東亜大学が中心となり岡山理科大学や岡山大学病院が協力し、5名の修士号留学生の受け入れる予定だった。それがコロナ禍と政情悪化により事業そのものの縮小を余儀なくされる中、日本側の熱意で支援は継続されたが、23年10月末でプロジェクトは終了した。

18年6月の1期生入学には50名以上の希望者があり、18名が選ばれた。翌19年6月には2期生として18名が入学した。このように順調に入学が増え、20年1月入学の3期生は12名に留まり、MEのミャンマーでの認知度の低さ

や将来に対する不安が要因と考えられた。そしてコロナの影響を受けることになる。2期生の卒業や病院配置の遅れ、そして日本からの渡航が厳しくなったことから3期生は長期休校となり、入学前の病院勤務に戻った。追い打ちをかけるように21年2月からの政情問題。この状況下でも、日本側はオンライン講義や短期間の渡航による病院実習を行い、3期生の卒業にこぎつけた。修士留学生も2期生の中から1名を東亜大で受け入れた。最終的な1年コースの卒業生は1期生18名、2期生18名、3期生12名の合計48名。その後、反政府運動などによる行方不明、離脱もあってMEの人数は減少し、23年9月の時点で11名(1期生8名、2期生3名)が各地の病院で勤務、3期生の8名が首都ネピド1での新たなME研修に参加している。



1期生(手前)を前に話す木股教授(左) 18年6月、ヤンゴン医療技術大学

1期生の1名は韓国に留学して修士取得後に博士課程へ進学。2期生の1名は東亜大を卒業し、UMTYで教員として勤務予定だ。困難な状況下で、本来のME配置目的の22%程度に留まる結果になった。

今後のフォロー模索

23年9月と10月には現地でも、ミャンマー保健省と日本側で将来を見据えた会議を開催した。セミナーでは、卒業生による現状と課題が発表され、非常に多く

手術成功、はつきり見える 先天性白内障の子ども7人

先天性白内障で、このままなら失明を免れないミャンマーの子ども7人が昨年12月、ヤンゴンの国立眼科病院で手術を受けた。岡山市の認定NPO法人「ヒカリカナタ基金」(竹内昌彦理事長)が支援した。基金の谷口真吾副理事長、中川美



手術は成功、家族と一緒に記念撮影＝ヤンゴンの国立眼科病院

岡山のNPO 3回目の支援

登里理事と協会の岡田茂理事長がヤンゴンへ。同病院を訪れ、手術費用や、子どもに付き添う家族らの旅費、滞在費を贈った。手術はオーストラリアで白内障手術の最新技術を学んだタントゥンアウン医師が手がけた。初日4人、2日目3人の全員が成功だった。眼帯が取れた子どもたちは谷口さんらが用意したクレヨンと画用紙を受け取り、はつきり見えるようになった目で思い思いの絵を描いた。これらの絵は岡山で基金の活動報告と合わせて展示する予定。同基金は2018、19年にも8人ずつミャンマーの先天性白内障の子の手術を支援している。

の仕事をごなしていることが明らかになった。各地の病院長からMEの仕事の重要性と拡充の必要性が強く協調されたのは、プロジェクトの大きな成果であったと考える。

保健省との会議では、MEの必要性が認知され、その結果、4期生の受け入れを1年後に再開すること、4年生学部を数年後に創設すること、さらにはMEの地位の確立のためにライセンス制度の早期確立を進めることが確約された。今後は、ミャンマー自身による人材育成の推進が強く望まれ、日本側としても何らかの形でフォローしていくことを模索することになる。

最近では新聞やテレビで、ミャンマーのニュースを見かけることが少ない。「あの国はどうなっているのか、さっぱりわからない」と、私の周辺でもそんな声を聞きます。メディアの片隅にいた者として誤解を恐れずにいえば、大きな出来事も月日が経つにつれ、メディアの関心は薄れてゆき、読者や視聴者の興味もまた冷めてゆきます。まして世界はウクライナとガザの戦火。耳目はこちらの方に集まります▼新聞やテレビには「節目もの」と呼ぶニュースがあります。世界を驚かせた政変劇や、社会を揺るがした大災害、大事故の発生から1年、2年、3年…といった節目のときの報道です。この2月1日はミャンマーで国軍がクーデターによって実権を握って丸3年。この日とその前後には、この3年間を振り返りつつ、ミャンマーの今と混乱収束の見通しなどが報じられるはず。ぜひ、目をとめて下さい。(西崎)

編集後記